(九) 琴ひく猿

南海が仙界に入つてから数年たつたころ、米ケ森の山蔭にてある人が猿をみた。その猿は南海愛用の琴をつるで結んで背おつていたという。その後、米ケ森付近を通ると琴の音が聞えたともいう。それは村人が聞きなれた南海がいつも弾じた曲であり、その音律も南海のそれと同じ正しさであつたという。この琴の聞える山林を「琴ケ岱」といつている。

（荒　川）